

2025年9月28日

西村隆星

主題「水腫の人の癒やし」

ルカの福音書 14:1-6

序

先週は、休暇をいただきゆっくりする時間を取ることができました。ありがとうございます。その中でいくつかの家にお邪魔して良い交わりの時を持たせていただきました。一緒に食事をしたり、交わりの時間を持つことは大切なことだな、ということを改めて思われました。みなさんとても「歓迎」してくださって、その中でも、わたしが大学生の時に関わっていた小学1年生と幼稚園児だった子と12年ぶりに再会して、彼らは今や大学生と高校生。二人とも覚えてくれていて、神様が与えてくださった出会いに感謝でいっぱいでした。今日から14章に入っていきます。今日の箇所は、イエスが食事に呼ばれて行った先での出来事。これまでも共にルカの福音書を読んできましたが、同じような場面がけっこうあるわけですね。安息日に、パリサイ人たちと食事、癒やし、このワードを聞くと「あ、なんか聞いたことあるかも」と思うのではないかと思います。1節をご覧ください。

1. 水腫をわずらっている者

ある安息日のこと、イエスは食事をするために、パリサイ派のある指導者の家に入られた。そのとき人々はじっとイエスを見つめていた。

イエスを呼んだ人はパリサイ派の指導者。調べていくと、彼はサンヘドリンという議会の一員、簡単に言うとパリサイ派の中でも偉い人だと言われています。その人に食事に呼ばれて家に入った。するとそこで待っていたのは、何だか異様な雰囲気。普通食事に呼んだのなら「歓迎」するわけです。しかし、「そのとき人々はじっとイエスを見つめていた」とある。ちょっと異様、違和感がある、というか恐さすら感じる情景です。歓迎とはどうにもとれない。むしろ、これまでと同じようにイエスが何かをしでかして、訴えられるものはないかとじろじろと見定める感じ。そんな中で2節で急に一人の人が紹介される。2節。

見よ、イエスの前には、水腫をわずらっている人がいた。

イエスが入ってきた家の中。そしてその前には、「水腫」の病をわずらっている人がいた。この「水腫」は、体の水分が異常に膨れ上がったり、溜まった状態のこと。むくみがさらにひどくなったような状態のこと。そしてこの「水腫」をわずらっていることは、旧約聖書において「神からのろわれた結果」とされていた。そうすると、疑問が湧いてくるわけで

す。それは、なぜ「パリサイ派のある指導者の家」の食卓に「水腫」をわずらっている人がいたのか。彼は呼ばれたのか。それとも彼らの仲間であるのか、と。その答えは、3-4節を見るとはっきりと分かります。3-4節。

イエスは、律法の専門家たちやパリサイ人たちに対して、「安息日に癒やすのは律法にかなっているのでしょうか、いないのでしょうか」と言われた。彼らは黙っていた。それで、イエスはその人を抱いて癒やし、帰された。

3節で「人々」が「律法の専門家たちやパリサイ人たち」であったことが分かるわけです。そして彼らは、水腫の人が癒やしについて問われた時、黙っていた。治してください、とはならなかった。もし大切な仲間であるならば、癒やしを求めたはずです。しかし、「人々」は求めなかった。むしろ、黙ってどうなるかを見ていた。ですから、この水腫の人はおそらくパリサイ人たちに連れてこられ、イエスを訴えるためのきっかけとして利用された。水腫を患ったこの人は、ここに来ることを断ることなんてできなかったと思います。権力は圧倒的にパリサイ人の指導者のほうが上。「水腫」をわずらうことで「神からのろわれた」存在として見られていた彼。そこにイエスのことばが響きます。

「安息日に癒やすのは律法にかなっているのでしょうか、いないのでしょうか」

その言葉に対して、パリサイ人たちは黙っていた。そんな中でイエスは、水腫を患った彼を「抱いて、癒やし」てくれた。神にのろわれたと言われ周りからは、白い目で見られていた彼を抱きしめて、癒された。痛みと苦しみの中にいた。そんな光の見えない毎日。挙げ句の果てには、パリサイ人たちから利用されてしまう。そんな彼をイエスは抱きしめられた。そして癒やしを与えられた。ただ癒やしを与えるだけではなかった。彼のこれまでの苦しみを知り、その部分に触れられ、癒やされた。神にのろわれた者として蔑まれた彼を抱きしめ、愛を与えられた。そして、イエスは彼を「帰された」。無理やり連れて来られたこの食事の場。来たくなかったが、来なくてはならなかった。しかし、イエスによって帰ることが許された。状況は何も変わらない。パリサイ派の指導者は変わらずいる。しかし、彼はこの指導者のことばを聞くのではなく、人々のことばを聞くのではなく、イエスのことばに聞き、帰って行った。

2. 律法の本質

イエスの尋ねられた安息日における癒やしの問題。それは少し前のルカ 13:10-17 においても安息日における癒やしが問題となった。そこで会堂管理者はイエスが癒やしを行ったこ

とについて憤った。しかし、イエスはその考えに賛同する者たちを「偽善者たち」と非難されてこのように語られた。13:15-16 節。

しかし、主は彼に答えられた。「偽善者たち。あなたがたはそれぞれ、安息日に、自分の牛やろばを飼葉桶からほどき、連れて行って水を飲ませるではありませんか。この人はアブラハムの娘です。それを十八年もの間サタンが縛っていたのです。安息日に、この束縛を解いてやるべきではありませんか。」

安息日にこそこの束縛から解くべきだ、と言われた。そしてこの話を聞いた人々の反応がこのようにある。13 章 17 節。

イエスがこう話されると、反対していた者たちはみな恥じ入り、群衆はみな、イエスがなされたすべての輝かしいみわざを喜んだ。

この箇所を見ると、何だか今日の箇所と似ているな、と思わされる。今日の箇所で登場する「人々」。彼らも会堂管理人と同じ思いを持っていた。それは、「働くべき日は六日ある。だから、その間に来て治してもらいなさい。安息日にはいけない」という考え。つまり、安息日とは労働をしてはならない日であり、人の癒やしよりも、人への愛よりも「かたち」が、「ルールを守る」ことが何よりも大事だ、という考え。だからこそイエスの質問に黙った。彼らはこの出来事を知っていた。だからこそ黙っていた。そして目の前で神にのろわれた者が癒やされた。続けてイエスは言われた。5-6 節。

それから、彼らに言われた。「自分の息子や牛が井戸に落ちたのに、安息日だからといって、すぐに引き上げてやらない者が、あなたがたのうちにいるでしょうか。」彼らはこれに答えることができなかった。

安息日に息子や牛が井戸に落ちれば助けることは当たり前だろう、というイエスのことばに人々は誰も答えることができなかった。黙っていた。それは当然のことだったから。しかし、彼らはこうも思ったかもしれない。安息日に命を守ることを優先することを許されているのではないか。それなら、このたとえとこの水腫の者の癒やしは別じゃないか、と。いま治さなくても、癒やさなくても、いつでもいいじゃないか、と。しかし、13:16 で腰の曲がった女性の癒やしについて、イエスはこのように言われています。

この人はアブラハムの娘です。それを十八年もの間サタンが縛っていたのです。
安息日に、この束縛を解いてやるべきではありませんか。

結論 神の与える安息

「安息日に、この束縛を解いてやるべきではありませんか」。

水腫をわずらっていた彼。彼がどのくらいの期間、水腫をわずらっていたのかは分からない。しかし、パリサイ派の人たちが知っているくらいには、周知の事実だった。みんなが知るくらいには、長い間、苦しみの中にいた。周りからは蔑まれ、神にのろわれた者として扱われる。水腫の痛みは増してくる。生活も難しさが増えてくる。そんな毎日はまさに束縛の毎日。イエスにとって彼の状況は、「自分の息子や牛が井戸に落ち」ている状態。助けを求め、死に瀕している。そのような者を目の前にして、「安息日だからといって、すぐに引き上げてやらない者が、あなたがたのうちにいる」だろうか。むしろ、安息日にこそ、いのちを与える日だからこそ、助け、束縛を解くのだ、と。だからこそイエスはパリサイ人たちに聞かれた。

「安息日に癒やすのは律法にかなっているのでしょうか、いないのでしょうか」

律法の本質は、神を愛し、人を愛すること。そして安息日は人間に真の安息をもたらす日。この苦しみの束縛から解くことは、まさに私たちが造られた神を愛し、神の造られた人を愛すること。そして、神と出会うという本当の安息をもたらすこと。この問いを突きつけられたとき、パリサイ人たちは黙った。イエスの癒やしを見て、続けて語られた質問にも答えられなかった。それは神に目を向けるのではなく、自分の正義が、プライドが、憎しみが、心を支配していたから。それは私たちも同じであるかもしれません。神のことばを前にするとき、自らが問われてくる。これまで自分が築き上げてきた常識、価値観、正義。これらが私たちに高く、分厚い心の壁となってその問いをなかったことのようにしてしまう。しかし、イエスは私たちに、自らの正しさを捨て、神の律法に立ち返るように招かれる。それは水腫の人を愛されたように。抱きしめられたように。イエスは私の心にある誰からも、神からも見放されているとさえ思う、あまりにもどうしようもない、真っ黒で、ドロドロした汚いところを知っていてなお、抱きしめてくださる。癒やしを与えてくださる。これが本当の安息だと、これが本当の救いだと、私にとって一番の方法を持って教えてくださる。そのとき、これまで罪に、自分の正義に、プライドに、憎しみに、束縛されていた私は、イエスにあって自由にされる。水腫の人が癒やされて、イエスのことばによって帰って行ったように、私たちもイエスのもとへと帰っていくのです。私の本当の安息は、救いはイエスのところにあります。私たちはこのことを告白し続ける群れとして歩み続けていきましょう。